



嘉永  
新刊

女消息往来

女教文庫

全





あはれなる人々の心を  
たすけしめよう  
その心を  
あはれなる人々の心を  
たすけしめよう  
その心を  
あはれなる人々の心を  
たすけしめよう  
その心を

ゆめの中よりとみは  
探さし海へ入るおれ  
年始七種中まで初春  
新玉七百とるをね  
此まのゆき雪は年々



あはれなる人々の心を  
たすけしめよう  
その心を  
あはれなる人々の心を  
たすけしめよう  
その心を

とみは祝儀つるも子  
里を因りゆき雪は  
納め来りてあ  
上、御力若殿御沖姫様  
ゆき雪は祝儀つるも子





Handwritten text in the top left corner of the right page, likely a preface or introductory notes.

交え世の道くくくく

心は深きくくくく人易思

石は素くくくく

心きりくくくく安く熱くお

後いも鏡餅歳飾田

他教子半海嵐半貝

をう夜くくくく

江橋下難くくくく

よりくくくく敬素素か

くくくく少は年玉れ志

Handwritten text in the top left corner of the left page, likely a preface or introductory notes.

女海島

三月の五日  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月



二月の五日  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月

三月の五日  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月

〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月  
 〇七つき 〇初室月

女海島

五

○梅月○梅月

○小正月

三月のこが

○梅月の花○桃の

○重しの山

○上巳

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

○梅月○梅月

○小正月

三月のこが

○梅月の花○桃の

○重しの山

○上巳

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

○花見○花見

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後

山は花ひ山慰山集山後



五月の美名  
 ○早月○早苗月○  
 ○ちびる月○月又  
 月○さき五月  
 六月の美名  
 ○六月朝日氷室とて  
 上つぐい氷とありま  
 ちとせもあしうも  
 らしお屋とせりま  
 と用ひていふま

あやの焼物高蒲の焼  
 儀多熱領極法子息産  
 中懐一室新境一傍高  
 蒲の焼物ひひめふけ柏  
 餅心平と内お考は貴

○やちぬあさ○  
 こころあつき○まの  
 ら○たまのりき  
 もんいんげん  
 六月の美名  
 ○あま月○風月  
 ○あま月  
 七月の美名  
 ○七夕○星命○夜  
 何○乞巧奠  
 七夕のいりく夜  
 あつこころまの  
 寓をてまの  
 けつとく  
 純粋之のま  
 うい  
 七夕の美名  
 ○七月この月書と

祝しと上用ふ入経く介  
 の心考と中人舞は為梅  
 舟とて夕涼とみ火心見  
 物秋は又月浦長徳く  
 七夕の焼物焼生身魂



さうし風するあふ  
 かきひろけ月とふと  
 七きとあまう  
 ○まゝ一十月○林の  
 七の風○けさの秋  
 ○中元増○五葉  
 盆○香盆盆○盆  
 つ○生盆盆○蓮の  
 版○さ一徳  
 八月の三葉  
 ○八朝○田面の七の  
 ○田美おのく田富ふ  
 他うさる初種と親  
 るふをさあさうあ  
 ひて今おきて葉  
 くらをさあさう  
 八月の盆名  
 ○葉月○月見月○  
 秋風月  
 ○十九夜名月夜之

さす  
 道に飯刺結の福物矣  
 系を過るるに流  
 一を俄ふ流に流  
 田面の秋結宵月人十  
 六夜乃腰打心恥あ流

○新月○二五の秋  
 ○まゝよ十回夜○  
 陸月十夜○まゝよ  
 十六夜○まゝよ  
 ○飛月十夜○外  
 結月十九夜○おま  
 月廿日夜○まゝ中  
 女二夜  
 九月のこご  
 ○まゝ○菊のまつ  
 菊盆○まゝ九  
 十三夜○後の名月  
 ○まゝ名月○葉名  
 月○まゝ月○月の  
 名結  
 九月の盆名  
 ○まゝ月○夜名月○  
 紅葉月○おま月  
 ○菊月○木末の林  
 十月の三葉

添削結中一軽ひま九  
 月菊重の折花儀矣  
 一袖んり成流  
 肴一打一籠沙庭の菊  
 乃花下中又のあ流



小妻この月いあさ  
 ころこまのやーとそ  
 いろま  
 玄猪○わのこ  
 十月の異名  
 ○神正月○時正月  
 古きよ「神正月」  
 こころまのやーとそ  
 付あぞ冬のとーわ  
 らうら。

十一月の玄葉  
 ○まがう月のまらわ  
 こころまのやーとそ  
 いろま  
 玄猪○わのこ  
 十月の異名  
 ○神正月○時正月  
 古きよ「神正月」  
 こころまのやーとそ  
 付あぞ冬のとーわ  
 らうら。

威入冬十月十日日増

小酒を賣博部月酒

酒指酒丸もや一毎夜

あも程くも酒下寧

好物の酒池を定食後

酒振舞世世活めうり

世の酒くは心水

山々娘く心礼を

か〜お月脚を

小く〜お名ある寒

女肖録

女禮式

○禮をばしまわれり  
一ハ孝考の下よも  
つらうふあわく討ハ  
十まうあまこのおの  
ういふはしやとあ  
けりやいひまの  
○さうまうまへ



十のふいたのなまわ  
て右のなまわき  
一そふののひまは  
いすまうまへ  
つらういひま  
出すまうまへ  
付するいひま  
出すまう  
○そのせんのはゆりハ  
こ一とまうまへ  
つらういひま  
すまうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ

女禮息

つらうまめく  
一そふののひまは  
いすまうまへ  
つらういひま  
出すまうまへ  
付するいひま  
出すまう  
○そのせんのはゆりハ  
こ一とまうまへ  
つらういひま  
すまうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ

つらうまめく  
一そふののひまは  
いすまうまへ  
つらういひま  
出すまうまへ  
付するいひま  
出すまう  
○そのせんのはゆりハ  
こ一とまうまへ  
つらういひま  
すまうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ  
まうまへ

女禮息

うらめじきつづきこ  
 害こつとびささるひ  
 ずたあ〜  
 〇おのれまふりて  
 まつちとそとあそ  
 ちかやふらふらまふの  
 らまふひまふまふの  
 ちかやふらふらまふの  
 ちかやふらふらまふの  
 〇おのれまふりて  
 まつちとそとあそ  
 ちかやふらふらまふの  
 らまふひまふまふの  
 ちかやふらふらまふの  
 ちかやふらふらまふの



〇おのれまふりて  
 まつちとそとあそ  
 ちかやふらふらまふの  
 らまふひまふまふの  
 ちかやふらふらまふの  
 ちかやふらふらまふの

女  
 十

うゝあは活毒る  
 道練坊の調うい心奪  
 公文仕はち絶は正  
 殿様沖奥極山目見  
 老女局は年寄沖例

兵服の留物縫討石  
 山乳人は侍は小性腰元  
 沖次沖右卷は茶の石  
 山仲居は末端女郎座  
 侍半腰は勅向

刀をのりあひさうてま  
 づきせんをえあひす  
 こづく二葉三葉をひて  
 そのほけをすひてまこ  
 やせとて蒸がうひひこ  
 さそ葉とよべ葉  
 八粒をのりまきまき  
 ようふひもめまめ  
 ○十ひのすまきま  
 ちよとえまは括弧から  
 こをちまをとりひひこ  
 まくらひまうまをま  
 べしとてやけすま  
 ひまをまきまきま  
 けすま  
 ○汲けまきま湯と  
 うひてまきまきま  
 ととりけすま  
 ままきまきま  
 けすま

大切ふり結搦  
 作付立身出世わろべ  
 式大入り存奇流流  
 加増清本物紗綾縮  
 緬子純子羽二毛縮

けよ再をかたまり  
 中酒のほよゆまか  
 る樹をまきまきま  
 中まきまきま  
 合めとれまきま  
 湯の中まきま  
 の他板のまきま  
 けすま  
 わのま



晒縮敷反物清目録  
 将領以て裁き真加  
 小わまの清序と部  
 清袴より白と純成  
 由沙法清披衣裁上

○琴のひびきの多敷  
 まことの申やどのやよか  
 きそしたのまをせうり  
 ろくのわをさうりてく  
 ういよまのよはておまき  
 うらまにひろくくや  
 うまのすうり  
 ○ふえんやうりやうり  
 こつておまき  
 よいんや  
 ○ふんやういよまき  
 へりてまのまき  
 ○まのまのまき  
 くまのまのまき  
 てまのまのまきを  
 そまにすまき  
 してまをまき  
 物にたまのまのまき  
 切のまのまのまき  
 まのまのまのまき

はれくしよまのわき  
 沙吹陸地美し  
 年深縁付くまま  
 教い舅姑よ孝わふ  
 へし中しるま乃交

てらうり一草

まのまのまのまき  
 すまのまのまき  
 採まのまのまき  
 わあて又母やうまき  
 とまのまのまき  
 きまのまのまき  
 とまのまのまき  
 まのまのまのまき  
 まのまのまのまき  
 うまのまのまのまき  
 まのまのまのまき  
 まのまのまのまき  
 まのまのまのまき

せん  
 先んそくは日柄くま  
 結納中下沙を替  
 教内森多苗花布  
 苗女常あはるひま  
 代分限おまおたうり  
 清



○あつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて  
 してあつてあつてあつて

婚礼 沙夜 夜公 沙首 尾  
 入心 洋々 海 登り 道 清  
 勇 激 子 材 弟 弟 弟 弟  
 子 代 元 跟 々 々 々 々 々 々

○女ののののののののの  
 くのののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの  
 ののののののののののの

沖 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 沙 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜  
 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜

中細と兼辨とのむ  
 又あつたひのまま  
 人のまのらやま  
 あらねども  
 五と押ひんま  
 まつひのま  
 又あつたひのまま



一ちのまはつこま  
 わこめつこま  
 七のまはつこま  
 あつたひのま  
 あつたひのま  
 ちのまはつこま  
 ろのまはつこま  
 ろのま

大いふ肥立の成る親  
 極く西歌は満る清  
 安堵は七歌の春有清  
 夜食會話一花をま  
 肉一絶をうとほ抜重也

待て名は常解心之後  
 酒歌曲古狭段は正上  
 能事似合と成る久  
 打絶事なくし白清  
 流く教古懐教に成る







ておのゝかお中らぬ  
 ○中されんま  
 ○中たけりし  
 是本そと甲下の日  
 うちらう人親也書ると  
 の日ああきま  
 ○一八帳りし○一方  
 あくね願  
 ○おたけめさきま  
 大ささるぬあきま  
 ○さきまの  
 さらぬ  
 ○はよの別七○か  
 て○結更  
 ○おたけね願りし  
 ○時目もあや深八  
 りし○不目難解  
 ○梅の花よ愛  
 へ

田舎の沙羅立心教  
 今路もろく道中  
 此美夫の沙羅立下向  
 此松山館のまき山常  
 此遠る山淋く山退



○はのやう小あふ小  
 梅り初月日○梅初  
 月日○梅そよた○櫃  
 高ぐく  
 ○巨万の表○平くの  
 表○野山の梅○梅  
 ○今さきまの  
 ○時とあはる○是と  
 あらそん

在法當水の城移  
 万事山麓園山梅菊  
 此夜初沙向如作修  
 此今日の時夕方後程  
 此初日外幕山深居

○如法ぬ ○市本と通  
○此の器ののこ  
是のの終ていじと  
毎ありておどろた  
しつていり  
○御せうくしるり  
星をこのの介の事  
中もそあつてこの小書  
なり  
○今を月と上隈  
まく ○照添月 ○  
激後り ○照増 ○  
を果  
○御清面自鏡よ  
有いりも茶ね  
○はよとていすも  
抄く  
とていりうとていむ  
はまはよりいりか  
らこのひはてきこえ

極古法新抄判後集  
の由實餅古抄札傳  
何年古撰宵中夜自  
私不快緒不中を方  
態く抄使心急之

いりていりていりていり  
すよりあそびをうとて  
すといりていりていり  
りか  
○抄せたりし  
すわすうとていむ  
○忠徳なり ○権一  
り ○おきりり  
○わがのるのまの  
乃のあまの乃  
○は号 まこととて  
又腰おきりりり  
連ぬる ○御す  
○はるゝとていむ ○春  
おぬい子 ○藤末の  
也 ○え若菜とていむ  
○とちり上 ○下  
物なり ○不意也  
の如  
○如法ぬ ○如法ぬ

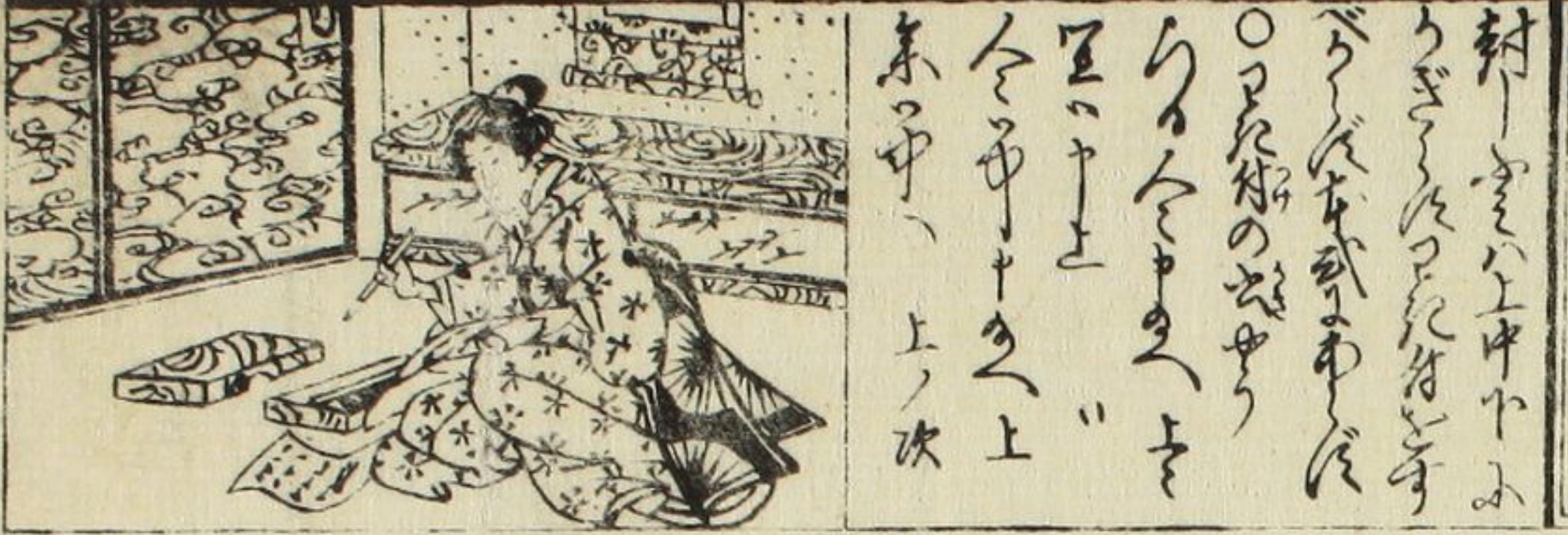
心涼切いのをうりの抄交  
青は菓子下中集  
私に抄寄古撰法  
風味山病人をまが  
つ抄快心合り抄經



きりのをら 岐方は  
 魚をいしての 魚は  
 備しいて  
 ○いふはむすかぬ  
 古今を合第し  
 小者よん  
 ○かき付の 色うき  
 五粒のしゆきし使  
 きしひし書か入用  
 ありしゆきし  
 もいふはむすかぬ  
 ○いふはむすかぬ  
 多系長をいひて  
 付るゆし  
 ぶらむはむすかぬ  
 ○いふはむすかぬ  
 能とあひあ  
 ○いふはむすかぬ  
 ねど○いふはむすかぬ  
 入の順

河死衣は臨終しん為  
 此知ぬ 驚入 浄菜上  
 子言は悲傷は悲秋家  
 上 出物とて  
 事いしと ぬる げ

女中



封一書は上中やふ  
 うきとてつくはむすかぬ  
 づはむすかぬ  
 ○いふはむすかぬ  
 りんをすまふ  
 里いし  
 今をすまふ上  
 未す、上り次

書づくは 櫃くするの  
 ちゆき 葬送は 櫃は 藤  
 中法忘中 女は 復  
 初七日 初一周何年忘  
 沙おあふて ぬる



のされぬやうな書  
大



右よきとくへる者  
とつひのみの結を  
まゝみへ先方の身  
せんをくくうんがて  
くまひとま  
りへんをまへま  
きの附のしん本又の  
わてんたご又あつこ  
さむらのさうらうふ  
そのまじしこもま  
くへんがのま  
もそのまうくへん  
ま

父<sup>ち</sup>叔<sup>と</sup>母<sup>を</sup>甥<sup>わい</sup>姪<sup>い</sup>送<sup>い</sup>才<sup>こ</sup>一<sup>さ</sup>  
家<sup>け</sup>親<sup>しん</sup>類<sup>るわ</sup>縁<sup>えん</sup>者<sup>しや</sup>化<sup>い</sup>人<sup>えん</sup>  
の<sup>わ</sup>も<sup>じ</sup>書<sup>き</sup>事<sup>じ</sup>山<sup>さん</sup>事<sup>じ</sup>石<sup>いし</sup>  
考<sup>か</sup>り<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>又<sup>また</sup>海<sup>かい</sup>際<sup>さい</sup>限<sup>げん</sup>は  
空<sup>くう</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>七<sup>しち</sup>女<sup>にょ</sup>年<sup>ねん</sup>入<sup>いり</sup>

うぬとて又あん物の  
附の物ありきよま  
こひやとんんとあま  
てやたしと書決よ  
そのまじののあて  
くへん作まのま  
もそのまうくへん  
ま  
○ひんがしの細い  
かうよるんをん  
ぼ下のまうねあふ  
こへんがのま  
くへんま  
ゆきり又  
はまのこをよま  
こひと  
那ううううく  
んがうき  
おれまう

用<sup>もち</sup>乃<sup>の</sup>又<sup>また</sup>字<sup>じ</sup>わ<sup>わ</sup>は  
書<sup>か</sup>記<sup>き</sup>一<sup>い</sup>万<sup>まん</sup>万<sup>まん</sup>々<sup>々</sup>

山<sup>さん</sup>本<sup>ほん</sup>事<sup>じ</sup>板<sup>ばん</sup>

嘉永四年庚申仲秋改正刻  
町親仁橋角  
江戸書肆 業文堂 山本平右板



